

認知的エンハンスメントと人間観への影響

信原幸弘

脳科学が発達すれば、脳の働きから心の働きを理解することがおそらく可能になってくるだろう。そしてそのような理解が得られれば、脳を操作することによって、心的能力を高めることも可能になるかもしれない。たとえば、英単語を覚えるとき、脳のなかでどのような神経回路が形成されるかが明らかになれば、ある人の脳に電気的ないし磁気的な刺激を与えたり、外科的に神経配線を変えたりすることによって、そのような神経回路を人為的に形成し、その人に英単語の知識を植えられることが可能になるかもしれない。

脳科学によるこのような心的能力の増強（認知的エンハンスメント）が可能になれば、それをじっさいに行うことは、一見、望ましいことのように思われる。われわれは勞せず、英単語の知識を獲得することができ、しかも通常の学習によっては獲得できないような膨大な数の英単語の知識を獲得することも可能であろう。しかし、このような認知的エンハンスメントは、われわれが現在もっている人間観に甚大な影響をもたらすおそれがある。脳科学による認知的エンハンスメントは、心的能力の獲得の仕方を根本的に変えるし、また獲得される心的能力のレベルも根本的に変えてしまう。それは、われわれ人間の現在のあり方ないし生き方を根本的に変えてしまうだろう。そうだとすれば、それは、われわれが現在もっている人間観、つまり

人間とはどのようなものなのかについての基本的な了解を変容させてしまう恐れがあるのである。

本稿では、脳科学による認知的エンハンスメントが現在のわれわれの人間観にどのような影響を及ぼす可能性があるかを考察する。そのために、まず、脳科学的な認知的エンハンスメントがどのような基本的特徴をもつかを検討し、そのような特徴としてふたつの点を取りあげる。すなわち、脳科学による認知的エンハンスメントは、それを達成するための努力が不要であるという点と、また超人類への道を切り開くという点である。つぎにこれらの特徴が現在のわれわれの人間観にどのような影響を及ぼすかを考察する。認知的エンハンスメントに努力が不要だということになれば、そのようなエンハンスメントは、努力して何かを達成することに人間としての価値があるという現在の人間観に深刻な影響を与えるだろう。この点を考察するために、そもそも努力による達成に価値があるという考えがいったいどのような考えなのかを吟味する。また、脳科学的な認知的エンハンスメントによって超人類への道が切り開かれるとすれば、そのようなエンハンスメントを行うことは、人間は人間であるべきだというわれわれの現在の人間観を端的に否定することになるのではなからうか。この点を考察するために、そもそもわれわれの現在の人間観のなかに、人間は人間であるべきだという見方が明確に含まれているのかどうかを検討することにしたい。

1 脳科学による認知的エンハンスメントの特徴

われわれは、日々、さまざまな仕方での心的能力の増強（つまり認知的エンハンスメント）を行っている。新聞を読んだり、テレビのニュースを見たりして、世の中の動きについて新しい情報を仕込んだり、ネットで検索することによって飛行機やホテルにカンする情報を仕入れる。また、統計を勉強するために、本を買って読んだり、統計の授業に出たり、あるいは統計の専門家に個人レッスンをお願いしたりする。さらに、知識

の獲得だけでなく、知識のじっさいの運用能力を高めるために、たとえば、英語カフェに行って英語でしゃべったり、じっさいに社会調査を行って統計的分析を試みたりする。そのほかにも、知識やその運用能力を獲得する基盤となる集中力や記憶力をそもそも向上させるために、座禅を行ったり、記憶術を学んだりする。

このような通常の認知的エンハンスメントと比べて、脳科学による認知的エンハンスメントにはどのような特徴があるだろうか。ここでは、人間観への影響という観点から、とくにふたつの特徴を取りあげたい。

第一に、脳科学による認知的エンハンスメントでは、それを達成するために本人による努力が必要とされない。従来の認知的エンハンスメントでは、たとえば、英単語を覚えるために、何度もその単語を書いたり、読んだり、その意味を確認したりする必要があり、このような反復学習を行うには、努力が必要であり、努力には労苦が伴う。これにたいして、脳科学的な方法で英単語の知識を獲得することが可能になれば、知識を獲得する当人は、とくに何も努力しなくても、電気的・磁気的な刺激を受けたり、脳の外科的な手術を受けたりしていればよい。

もっとも、従来の認知的エンハンスメントであっても、必ずしも努力を必要としない場合もある。たとえば、史実に忠実な時代劇を楽しみながら見ていると、おのずと歴史の知識が身に付くが、このような場合、けっして努力して見ているわけではない。また、将棋や囲碁のようなゲームを遊びでやっけていても、おのずと集中力や読みの力が身に付くが、やはり努力はしていない。このように楽しみや遊びで何かをしながらか、おのずと心的能力が向上する場合には、努力は不要である。しかし、それはむしろ例外的なケースであって、

(1) 認知的エンハンスメントの是非をめぐる論争については、スマートドラッグを例にとって植原(2008)が明快な整理を行っており、たいへん参考になる。

(2) 楽しみながら心的能力を向上させる場合でも、「努力している」と言われることもあるかもしれないが、そのような「努力」は

認知的エンハンスメントには、ふつうそれを達成するために、努力が必要である。

また、逆に、脳科学による認知的エンハンスメントであっても、努力を要するものがありうる。たとえば、ある磁気刺激を受ければ、英単語の知識が獲得されるとしても、そのためには、一日に何度も、磁気刺激を受け、しかもそれを数ヶ月間、継続しなければならぬとすると、努力が必要である。医学は、ふつう、患者の努力なしに、病気を治してくれるが、それでも、たとえば毎日、一定の薬を服用し続けなければならぬとか、苦痛を伴う放射線治療を毎週、受けなければならぬといった場合のように、ときには努力が必要な場合もある。それと同様に、脳科学的な認知的エンハンスメントであっても、努力が必要なこともある。しかし、通常は、脳科学的なエンハンスメントであれば、努力は不要である。

脳科学による認知的エンハンスメントの第二の特徴として挙げたいのは、それが超人類への道を切り開くという点である。脳科学的な認知的エンハンスメントは、もしそれが可能になれば、人間を理想的な人間へと改造する力だけではなく、人間を超えた存在へと改造していく力ももっている。

われわれはしばしば、自分の知識不足や感受性の無さを嘆いたり、意志の弱さにみずから呆れたりする。講義中にふとした話の流れから、現代の不況の原因を克明に描いてやりたいと思っても、どの銀行が破綻したのか、どの自動車会社が何に投資していたのか、具体的な名称が出てこない。また、美術館でせっかく名画を見ても、どこがよいのやら、さっぱり感動が湧き上がってこない。さらに、今日こそは何があっても論文を書こうと堅く決意しているのに、ついついテレビで広重の東海道五十三次が盗作かという面白い番組をやっているのを見かけると、それを最後まで見てしまう。われわれはこのような我ながら情けないあり方を脱して、豊富な知識と洞察力、豊かな情感、堅固な意志力を備えた理想的な人間になることを夢見る。

もっとも、理想的な人間というのは、そのような人並みはずれた心的能力を有するものではなく、あるがままの自分であるような人間のことだという考え方もありえよう。人には、生得的な資質に応じて、

その人にふさわしい自然なあり方というものがある。そのような自然なあり方こそがその人にとっての理想である。生まれつき記憶力のよくない人は、それほど豊かな知識を蓄えることはできないだろうが、それはそれでよいのである。無理して豊かな知識を獲得することは、その人の自然なあり方に反する。乏しい知識のまま生きていくことがその人にとっての理想なのである。理想的な人間をこのように考えたとすれば、われわれはとくに何もしなくても、理想的な人間になれるように思われるが、じつはこの考えが意味しているのはそのようなことではない。われわれはふつう、自分の自然なあり方に反して、もっと高い心的能力を身につけたいという欲求をもっており、その欲求に基づいて、すでに幾分か自分にとって不自然な心的能力を獲得してしまっている。したがって、理想的な人間になるためには、そのような欲求を抑制して、不自然な心的能力を自然なものに直さなければならないのである。³⁾

理想的な人間の捉え方にもいろいろありうるが、いずれにせよ、脳科学的な認知的エンハンスメントは、もしそれが可能になれば、われわれをそのような理想的な人間に改造する力をもっている。しかし、理想的な人間への改造は、それがどれほど驚くべきものであれ、まだ人間の枠内にとどまった改造である。脳科学による認知的エンハンスメントは、人間を理想的な人間に改造する力だけではなく、さらに人間を超えた存在、すなわち超人類へと改造する力ももっているのである。

われわれは現在、携帯電話を使って、いつでも、どこでも、人と交信することができる。固定電話のときには考えられないような利便さ、自由さである。しかし、それでも、携帯電話で交信するためには、電話を

労苦を伴うものではない。ここでは、「努力」は本質的に労苦を伴うものを意味することにしている。というのも、努力して達成することに価値があると言えるような努力を問題にしたいからである。

(3) 自然さを重視する観点から、人間の不自然なあり方を拒否する自然主義的な立場がある。この立場は所与の自然を恵みとして感謝する態度と結びつく。この態度と所与の自然を改造しようとする創造性の態度の対立としてエンハンスメント論争を整理しようとするバレンスの議論は興味深い。(Arcus 2006)。

通じて相手の声を聞き取り、電話に自分の声を吹きこまなければならぬ。もしわれわれの脳に電極を埋めこんで、自分の電極と相手の電極が電磁波で繋がれるようにすれば、われわれは耳で聞いたり、口で声を発したりすることなく、頭のなかで聞いたり声を発したりすることで、相手と交信することができる。それどころか、そもそも頭のなかで相手の声を聞いたり、自分の声を発したりする必要さえなくすることも可能であろう。電極を脳の聴覚中枢や発声中枢に埋めこむのではなく、脳の思考中枢に埋めこむことで、われわれは直接、思考を相手とやりとりすることができる。しかも、音声を通じての場合とちがって、一度に大量の思考をやりとりすることも可能であろう。

さらに、われわれは自分の脳裏に浮かぶ意識的な思考だけではなく、無意識的な思考もやりとりすることができるだろう。われわれには、意識的な思考だけではなく、その背後に膨大な量の無意識的な思考がある。われわれは、地球はまるいとか、三角形の内角の和は一八〇度だとか、アメリカの大統領はオバマだとか、昨日、焼き肉を食べたとか考えているが、このような思考はふつうは意識にのぼらない。このような無意識的な思考を無意識のまま、他人とやりとりすることができる。しかも、常時、そのようなやりとりをすることができ^④る。

しかし、もしわたしが無意識的な思考も含めて、すべての思考を常時、他人とやりとりするようになれば、わたしと他の他人はもはやふたりの別の人間と言えるだろうか。むしろ、わたしと他人の脳はひとつに融合し、ひとつの心、ひとつの人格を実現していると言わなければならない。それは、右脳と左脳が脳梁などを介して密接に交信することによってひとつの脳を構成し、それによってひとつの心、ひとつの人格を実現しているのと同じではなからうか。

もしそうだとすれば、わたしはもはや自分だけでひとりの人間であるわけではなく、わたしと繋がれた他人とあわせてひとりの人間だということになる。しかし、そのようなあり方をしたものは、もはや人間とは

言えないのではなからうか。それは、人間の新しいあり方というよりも、人間を超えたもののあり方だと言
うべきであるように思われる。

脳科学による認知的エンハンスメントは、もしそれが可能だとすれば、人間を超人類へと改造する力を
もっている。それは、複数の人間をひとつの心的統合体にしたたり、一人で複数の身体を有したり、身体を脱
して電脳空間の電子的存在になったりすることを可能にする。このように、それは超人類への道を切り開く力
をもっているのである。

2 努力の不要性と手段内包的目標

脳科学による認知的エンハンスメントは、心的能力を増強させるために本人による努力を必要としない。
しかし、そのように努力せずに心的能力を高めることは、われわれの現在の人間観に反することではなから
うか。というのも、現在の人間観には、人間は努力して心的能力を高めるべきだという見方が含まれている
ように思われるからである。

われわれは、現在、反復学習をすることで、苦勞していろいろな英単語を覚える。そうすると、英語がで

(4) ここでは、通常の考え方にしたがって、意識的な思考と無意識的な思考はいずれも思考中枢で処理されており、両者はただ意識
的かどうかの点でのみ異なるとして論述を行ったが、私見では、この見方は厳密に言えば、正しくない。意識的な思考はふつう言
語的な形態をとっているのに対し、無意識的な思考はそうではない。地球はまるいと意識的に考えることは、「地球はまるい」と
頭のなかで、あるいは声に出して、意識的に言うことである。したがって、このような意識的な思考は聴覚中枢や発声中枢を介さ
ずに他者とやりとりすることはできないだろう。それに対して、無意識的な思考は言語的な形態をとらず、命題的な構造(構文
論的な構造)をもたない。それゆえ、無意識的な思考は、聴覚中枢や発声中枢を介さずに直接、他者とやりとりすることができる。
無意識的な思考から意識的な思考に移行することは、言語化ないし命題化の過程として理解できる。意識的な思考と無意識的な思
考の関係については、詳しくは信原2000の第5章を参照。

きる人だと言つて賞賛される。また、いろいろな名画を見比べ、美術の解説書を読み、美について思索するといった努力を重ねて、美の感受性を高める。そうすると、美的感性に富む人として賞賛される。さらに、何度も意志の弱さを経験して、そのたびに真摯な反省を行うことを通じて、やがて堅固な意志力を獲得する。そうすると、意志の強い人として賞賛される。

これに反して、脳科学的な認知的エンハンスメントによって、努力せずに英単語の知識や美への豊かな感受性、堅固な意志力を獲得したとしても、賞賛されることはないだろう。そのような人は、たしかに英語ができ、美的感性に富み、意志が強い人として認められるが、そのような人として賞賛されることはないであろう。現在のわれわれの人間観には、努力して心的能力を高めることに人間としての価値があるという見方が含まれているように思われる。

しかし、現在の人間観のもとでも、努力して心的能力を高めることは、本当に無条件に価値あることであろうか。それは、脳科学的な認知的エンハンスメントがまだ可能でない場合にかぎって、価値あることではなからうか。現在、英単語を反復学習によって苦勞して覚えることには、たしかに価値がある。しかし、脳科学的な手段によって、そのような苦勞をしなくても英単語の知識を身につけることができるようになれば、そのときでもなお、そのように努力して英単語を覚えることは、本当に価値のあることだろうか。

われわれは現在、電卓を使って、勞せずに掛け算や割り算を行うことができる。そのような状況にあるにもかかわらず、苦勞して筆算によって掛け算や割り算を行うことに、どのような価値があるだろうか。それは、何か特別な事情、たとえば筆算による掛け算の速さを競うゲームをやっているというような事情がなければ、むしろ愚かな行為であろう。それと同様に、脳科学的な方法によって勞せずに英単語の知識を獲得できるのに、わざわざ反復学習によって苦勞して英単語を覚えることは、特別な事情がないかぎり、むしろ愚かな行為として馬鹿にされるのであろう。しかも、それは、脳科学による認知的エンハンスメントが可能に

なることによって現在の人間観が変化したからそうなのではなく、現在の人間観のもとで、もともとそうなのではあるまいか。

通常、ひとつの目的を達成するために、複数の手段がありうる。その目的を達成するという観点だけからすれば、どの手段を選んでもよいはずである。しかし、「目的のために手段を選ばない」ということは、ふつう悪い意味で言われる。それは、われわれがある目的Aを達成しようとするとき、ふつうAとは別のいろいろな目的をもっているからである。たとえば、東京から京都へ行こうとするとき、新幹線でも、鈍行でも、あるいは徒歩でさえ、その目的を達成することができる。しかし、われわれはふつう、その目的以外にも、迅速に行くとか、安上がりですますとかいった目的をもっており、それらのさまざまな目的をもっともうまく満足させるような手段を選ばなければならない。

英単語の知識を獲得するという目的にとっては、脳科学的な手段が可能でない場合には、努力して反復学習するというのがふつうよい方法であろうが、脳科学的な手段が可能になれば、そのような手段を用いるのがむしろふつうよい方法となる。努力して英単語を覚えるべきだということは、現在の人間観のもとでも、無条件に成り立つことではなく、脳科学的な手段が可能でない場合にかぎって成り立つことであるにすぎない。しかし、それでは、努力して心的能力を高めるべきだということが現在の人間観のもとで無条件に成り立つような心的能力は存在しないのだろうか。いかなる心的能力も、脳科学的な手段が可能でない場合にかぎって、努力して高めるべきものにはすぎないのだろうか。

たとえば、誠実であるという心的能力を考えてみよう。われわれは、約束を破って人の怒りを買ったり、嘘をついて叱られたりするような経験をしながら、誠実な人間になろうと努力してそのような人間になる。そしてそのようにして誠実になることは、人間として価値あることとして賞賛される。しかし、脳科学的な手段によって誠実になることができるとしたら、どうであろうか。われわれは、約束を破って人の怒りを

買ったたり、嘘をついて叱られたりするような苦勞をしなくても、脳を適当に操作してもらおうことによって、誠実な人になることができる。そうだとしてみなお、苦勞して誠実になることに価値があるだろうか。

誠実さの場合には、まさに価値があるように思われる。脳科学的な手段によって誠実な人になったとしても、そのような人の誠実さほどか白々しい。そのような人も、たしかに特別な事情がないかぎり、約束を守り、嘘をつかないだろうが、脳科学的な手段によってそのような振舞いが可能になったとすれば、そうした振舞いに真正の誠実さを感じとることはむずかしい。たしかにそのような振る舞いを偽りの誠実さ（つまり誠実な振りをしているだけ）だと言うことはできないが、努力して誠実になった場合と比べると、いくぶん真正さに欠けると言わざるをえないだろう。やはり誠実さは、努力して獲得してはじめて、十分な価値があるように思われる。この点で、それは英単語の知識とは異なる。英単語の知識は、努力して獲得しようとするでなかつると、同じ価値がある。しかし、誠実さの場合は、そうではないのである。

脳科学的な手段によって努力せずに誠実になることが可能になったとしても、努力して誠実になることには、なお価値があると考えられる。それはけつして愚かなことではなく、むしろ人間としてそうすべきことなのである。脳科学的な手段によって誠実になる場合でも、たしかに誠実であるというそのあり方には、むしろ価値がある。不誠実なままでいるよりは、おそらく脳科学的な手段によってでも、誠実であるほうがよいであろう。しかし、努力して誠実になることには、誠実さそのものだけでなく、誠実になるという過程にも価値があり、それがさらに結果としての誠実さに価値を付加しているのである。

誠実な人間になるという目標は、努力して誠実になるのではないかぎり、十全な意味で達成することはできない。それは、他の何らかの目標によってではなく、それ自身によって、努力するという手段を要求するのである。そのような目標は、その目標自体が特定の手段を要求するという意味で、手段内包的な目標と言えよう。誠実な人間になるという目標は、手段内包的なのである。

誠実さには、このように努力して誠実になることに独自の価値があるという特異な性格がある。しかし、そうだとすれば、今度は、努力することを脳科学的な手段によって実現したら、どうであろうか。そうすれば、結局、脳科学的な手段によって十全な意味で誠実になることも可能ではなからうか。

しかし、努力を脳科学的な手段で実現することは、原理的に不可能であるように思われる。わたしはいま、努力して論文を書こうという気になっているが、努力して運動しようという気にはなっていない。そこで、脳科学者がわたしの脳のある部位に「努力促進剤」を注入することによって、わたしを努力して運動しようという気にさせたでしょう。わたしはそういう気になったので、いやいやながらも、寒風のなかをジョギングした。このとき、わたしは努力して運動したと言えるであろうか。

努力して何かをすることは、主体的にそれをすることである。わたしが努力して論文を書いたとすれば、わたしは主体的に論文を書いたのである。たとえ締切が迫っていて、論文を書かざるをえない状況にあったとしても、わたしがそのことも含めていろいろなことを考慮して最終的に論文を書こうと決めて書いているのならば、わたしは主体的に書いているのである。もしわたしが迫りくる締切に強い恐怖を感じて、ただもう恐怖のゆえに論文を書いたとすれば、わたしは主体的に書いたとは言えないであろう。しかし、恐怖を感じつつも、関連する事情を考慮して合理的に意思決定をし、そのうえで論文を書いているのであれば、わたしは主体的に書いているのである。

努力することは主体的に行うことである。たしかに努力することと主体的に行うことは、同じことではない。努力せずに主体的に行うことも可能である。わたしが黄色く色づいた銀杏並木を散歩しているとき、わたしは主体的にそうしているが、努力してそうしているわけではない。わたしは楽しみながら散歩しているのであって、苦勞してそうしているわけではない。努力には苦勞が伴うが、主体的であることには必ずしもそうではない。しかし、努力と主体性が同じではないにせよ、努力は必ず主体的なのである。

わたしが努力促進剤を注入されて、ジョギングを行うとき、わたしは主体的にそうしているわけではない。わたしは努力促進剤によって、いやいやながらもジョギングをするようにさせられているだけである。したがって、わたしは努力して運動したとは言えない。たとえ自分で努力促進剤を注入したとしても、そうである。わたしは努力して自分を運動するようにさせたかもしれないが、努力して運動したわけではないのである。

努力することは、主体的に行うことであるがゆえに、原理的に脳科学的な手段によっては実現できないように思われる。脳科学的な手段はわれわれから主体性を奪ってしまうからである。

そうだとすれば、結局のところ、努力して誠実になることは、脳科学的な手段によっては原理的に不可能である。したがって、十全な意味で誠実になることは、脳科学的な認知的エンハンスメントによって達成することはできない。しかし、われわれの現代の人間観には、人間は十全な意味で誠実になるべきだという見方が含まれているように思われる。それは、現代の人間観のもとでは、人間としてのあるべき成熟の仕方の一部であろう。脳科学による認知的エンハンスメントを実行することは、そのような成熟の仕方を否定することである。その点で、それは現代の人間観に少なくとも部分的に変更を迫るものなのである。

3 超人類への道と自己超越性

脳科学による認知的エンハンスメントのもうひとつの特徴は、それが人間を理想的な人間へ改造する力をもつだけではなく、人間を超えた存在へと改造する力をもっていることである。このような特徴をもつ認知的エンハンスメントを実行することは、明らかに現在の人間観に反するように思われる。しかし、本当にそうであろうか。

理想的な人間になることは、望ましいことであろう。豊富な知識、豊かな感受性、堅固な意志をもつことは、たしかに望ましいだろう。そのような特質を脳科学的な手段によって獲得してよいかという問題があるにせよ、それらは少なくともないよりはあったほうがよいという意味で、望ましい特質であろう。理想的な人間になることは望ましいという見方は、現代の人間観のなかに含まれていると言ってよいであろう。

しかし、どれほどすぐれた心的能力をもとうと、人間を超えた存在になっってしまうことについては、どうであろうか。脳科学による認知的エンハンスメントは、複数の人間をひとつの心的統合体にしたたり、一人で複数の身体をもったり、身体を脱して電脳空間の電子的存在になっったりすることを可能にする。このような超人類になることは、われわれの現在の人間観からして、はたして望ましいことであろうか。

人間が超人類になることを望ましいと考える人たちもいる。たとえば、ラメズ・ナムはつぎのように言う。「私たちは、もしそうしたいと思うならば、新しい種類の生命を生み出す種子となれるのだ。想像もつかないような新しい生物を生み出すものになる。……思うに、史上、これ以上に美しい使命、特権的な位置を与えられた種はほかにない。」(Zhuang 2005, 邦訳 p. 233)。人間は、人間にとどまらなければならない理由はない。もし可能ならば、人間は人間を超えたよりすぐれた存在になってもよい、あるいはそうなるべきだというわけである。

このような人間観は、一見、例外的であるように思われる。大多数の人は、たとえ脳科学的な手段によって人間が超人類になることが可能になったとしても、人間が超人類になることを望ましいとは考えていないように思われる。しかし、本当にそう考えてはいないのだろうか。

人間は、現在の自己を乗り越えてより高い自己を目指すとする傾向性がある。そしてこのような人間の自己超越的なあり方は望ましいものとして捉えられている。われわれは、たとえ現在の自分が満足すべきものであったとしても、それに甘んじず、より高い自己を目指すべきである。理想的な人間になることが望ま

しいと思われるのも、人間の自己超越性が望ましいと思われるからであろう。結局のところ、理想的な人間になるとしても、何かある一定の理想的なあり方というものがあって、それになるということではなく、そのときどきによりよいあり方があって、それになるということであり、それゆえ不断の自己超越を行っていくということにはかならないだろう。

人間には自己超越性がある。しかし、それは人間の枠内にとどまるべきであろうか。われわれは、つねにいまの自分を乗り越えてより高い自己を実現しようとするが、人間を超えてまで、より高い自己を目指すべきであろうか。それとも、あくまでも人間の範囲内で、より高い自己を目指すべきであろうか。

もし人間を超えるとしても、それがより高い自己になることであれば、それを目指してはならないという理由はないように思われる。超人類になることが望ましくないように思われるのは、超人類がもはや人間でないからではなく、脳科学的な手段によって可能になるとされる超人類が必ずしもより高い自己だとは思えないからである。複数の人間が融合した心的統合体や、一人で複数の身体を有する存在、あるいは身体を脱した電脳空間の電子的存在といったものは、われわれにとって今の自分を乗り越えて目指すべきより高い自己であろうか。そうだとする人は多くないであろう。

しかし、脳科学的な手段によって将来、可能になる超人類のなかには、われわれにとってより高い自己だと思えるものがあるかもしれない。それがどのようなものか具体的に特定することは、現時点ではたしかに困難であるが、たとえば脳科学的な手段によって天使のような存在になれるとすれば、われわれは天使になることを望ましいことだと考えるのではなからうか。天使はもはや人間ではない。しかし、そうであっても、天使になることはより高い自己になることとして望ましいものと思われるのではなからうか。

ただし、人間が人間を超えた存在になることは、自己の同一性を破ることである。自己の同一性をどう定義するかは困難な問題であるが、人間の自己は人間であるかぎりにおいてのみ同一でありうる。人間であり

つづけても、別の人間になってしまふ場合のように、自己の同一性が保たれない場合もあるが、人間でなくなれば、必ず自己の同一性は失われる。わたしが人間から超人類になったとすれば、人間であるわたしと超人類のわたしはもはや同じ自己ではありえない。それらはふたつの異なる自己である。人間である自己が消滅して、新たに超人類の自己が誕生したのである。このように自己の同一性が保持されないとしても、人間はいまの自分を超えてより高い自己を目指し、そのような自己超越性を望ましいものと捉えるように思われる。少なくとも、現在のわれわれの人間観には、それを望ましくないこととする明確な規定はないように思われる。

そうだとすれば、脳科学的な認知的エンハンスメントによって超人類になることは、必ずしもわれわれの現在の人間観に反することではない。その超人類がわれわれにとってより高い自己だと思えるようなものであれば、脳科学的な手段でそのような超人類になることは、われわれが尊重する人間の自己超越性からして、望ましいことだと思われる。

もっとも、どのような超人類であれ、人間は人間を超えた存在になるべきではなく、あくまでも人間にとどまるべきだと考える人もいよう。しかし、そのような人は必ずしも大多数だというわけではないのではなからうか。われわれの現在の人間観といっても、必ずしも明確なものではなく、そこには多様な要素、しかも必ずしもお互いに整合するとはかぎらない多様な要素が含まれる。しかし、以上の考察によって、少なくとも超人類になることがわれわれの現在の人間観に明確に反するとは言えないということは、明らかになっ

(5) aとbが同一かどうかを問題にしうるためには、同一性の基準が必要である。同一性の基準は、人、犬、猫のような種概念(種概念concept)によって提供される。aとbが人のとき、「aはbと同じ人である」が成り立つかどうかによって、aとbの同一性が判定される。aが人間でbが超人類のときは、「aはbと同じFである」が成り立ちうるような種概念Fは存在しない。したがって、ある人間とある超人類が同一であることはありえない。人間は人間のあいだでのみ、超人類は超人類のあいだでのみ、同一性を問題にしうる。同一性が同一性の基準を提供する種概念に依存するという点については、Wiggins 1980を参照。

たであろう。

参考文献

- Naam, R. 2005, *More Than Human*, Broadway Books. 邦訳、ラメズ・ナム『超人類へ』西尾香苗訳、河出書房新社、二〇〇六年。
- Paras, E. 2006, "Creativity, gratitude, and the enhancement debate," in J. Ilies (ed.), *Neuroethics*, Oxford University Press. 邦訳、エリック・パレンス「創造性、感謝、エンハンスメントの議論」シユディ・イレズ編『脳神経倫理学』高橋隆雄・糸和彦監修、田口修平・片岡宜子・加藤和訳、篠原出版新社、二〇〇八年、所収。
- Wiggins, D. 1980, *Sameness and Substance*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 植原亮 (2008) 「薬で頭をよくする社会」信原幸弘・原聖編『脳神経倫理学の展開』所収。
- 信原幸弘 (2000) 『考える脳・考えない脳』講談社現代新書。